平成23年5月1日発行　第42巻 第5号　毎月1回1日発行　昭和46年1月27日第3種郵便物認可
ISSN 0385-2229

月刊 地域保健

5
2011

●FRONT RUNNER
足立区足立保健所保健予防課
こころといのち支援担当課長
馬場優子さん

●PEOPLE
社団法人 難病の子どもとその家族へ夢を
大住 力さん

●緊急特集
「東日本大震災」現地レポート

●第1特集
保健師に必要な医学・からだの知識はどこまでか？

●第2特集
エビデンスに基づく骨粗しょう症対策

FRONT RUNNER

馬場優子さん

足立区　足立保健所保健予防課　こころといのち支援担当課長

「足を運んで信頼を得る」これは役所の中でも一緒です。

誰かに行動をとってもらうには、動機付けが必要なのです。

取材・文　編集部　photographs：Sei Kamiyasu

足立区は、東京23区の最北端に位置する。人口66万7891人、高齢化率21・6％（平成23年1月1日現在）。面積は約53・2平方キロメートルで、23区域総面積の約9％を占める。足立区役所本庁舎は、東武伊勢崎線の梅島駅から徒歩15分の距離にある。

馬場優子さんのいる衛生部足立保健所保健予防課の窓口を訪れると、奥の席から明るい笑顔で会釈する女性が見えた。馬場さんだ。

働く女性の姿にあこがれ

馬場さんは長野県の出身。10歳ぐらいのころだった。看護師だったお母さんが所属する主婦同士の会合に、たまたまその地域の保健師さんがやってきたという。長野県は脳卒中が多いということもあり、その保健師さんはみんなが日ごろ食べている味噌汁の塩分を測り、減塩のための指導をしていた。専業主婦が多かった当時、いきいきと働く女性の姿を目の当たりにして、「すてきだな」と感じ、あこがれを抱いた。そのころから馬場さんの将来の夢は「保健師さん」になった。

高校卒業後、公衆衛生や地域看護の人材育成に熱心に取り組んでいる自治医科大学附属看護学校（現・自治医科大学看護学部）に入学した。保健師をめざしていたものの、その前に脳卒中後のケアについても学びたいと、自治医科大学附属病院脳神経外科病棟に入り1年半勤務。その後人事異動となり、中央手術部の看護師として、主に脳神経外科の手術に従事することになったという。

「脳神経外科の手術は目が回るほど忙しく、24時間体制で行うものもしょっちゅうでした。手術を受けている患者さんをみているうちに、何だか人間が人間でなく、固体として見えてきてしまうようになって、だんだん感覚が麻痺してきました。自分には向いていなかったのでしょう。そこは半年間勤めて退職し、やはり当初の目標であった保健師に方向性を戻そうと、神奈川県

足立区役所本庁舎

第1特集

保健師に必要な医学・からだの知識はどこまでか？

objet：hiro

保健師に求められる基礎知識は医学、公衆衛生学、看護学、法律など幅広い。中でも医学の知識・からだの知識は保健師の専門性でこそないが、足腰を強くするためのいわば「基礎体力」であり、それを土台に経験を積み専門性は磨かれ、開花する。

近年、保健師の業務範囲は拡大しており、分散配置が進み、一人配置も少なくない。保健・福祉の分野で他の専門職が次々と登場する中で、日々業務に追われ、保健師らしい経験が積めず、アイデンティティーや自信を喪失している保健師も多いといわれる。しかし、たとえ一人配置でも、土台となる《医学知識》がしっかりしていれば、自信を持って効率よく専門性を高めていくことができると思われる。経験を積んだ保健師であっても、担当分野が変われば、日進月歩の《医学知識》にキャッチアップしていく努力が求められる。保健師である限り、《医学知識》の取得と更新は必須といえるだろう。

特集では、保健師の基礎体力として求められる《医学知識》について、どの範囲、どのレベルまで必要かを探るとともに、医療職としての正しい運用方法について考える。

P18 【概論】保健師にとっての医学知識
◎国吉秀樹（沖縄県健康増進課）

P24 【各論】私の考える保健師の医学知識①―県型保健所の立場から
◎川口洋子（奈良県桜井保健所）

P32 【各論】私の考える保健師の医学知識②―特別区保健所の立場から
◎奈良部晴美（世田谷区世田谷保健所）

P36 【各論】私の考える保健師の医学知識③―市町村の立場から
◎角田幸代（横須賀市）

ひよこ保健師 season 5

足で稼げば地域が見える

しっとりとした落ち着きと頼もしさ漂う3年目

田川佳名子（たがわかなこ）さん
●彦根市健康推進課

▲彦根市のキャラクターとして活躍する「ひこにゃん」と共に

◎取材・文・写真　西内義雄（医療・保健ジャーナリスト）

ある日、編集部にこんなメールが届いた。

「ひよこ保健師のページにうってつけの後輩がいます。母子保健を担当し、困難な事例にも前向きに対応しています（涙涙もありますが……）し、地区把握をしたまとめを健康推進員さんに伝え、一緒に地域の課題を考えたり、私生活では○○の達人（昨年度の退職者の送別会で披露してくれ感動しました！）だったり、実は私彼女のプリセプですが、反対に教えられることがいっぱいです」

文面から察すると、かなりデキるひよこさんのようだ。しかも○○の達人というのは珍しい（あえて今は秘密にしておきます）。

早速勤務先である彦根市福祉保健センターに行くと――入り口にはたくさんの乳児連れのお母さんたち。どうやら予防接種の日にあたったようで、喧騒の中で出会ったのが田川佳名子さん。今年3年目を迎える25歳だが、話し方といい身のこなしといい、とても古風で落ち着いている印象を受けたのであった。

親族の影響で看護職に興味を持つ

出身は愛知県豊川市。小さいころは歌手、小学生になると読書や社会科、理科の実験が好きになり、学校の先生になりたいと思っていた。では運動は苦手かというとそうではなく

「地域の活動でバスケットボールをしていましたし、伝統芸能に取り組んでいました。中学と高校は剣道部でした」

と、幅広いものに興味を持つ女の子だった。医療や看護に関心を持ち始めたのは中学校に入ってからだ。

「そのころ、看護専門学校に通いだした従姉がいたんです。そして母親も同じような時期に地元の保健センターで働き始めたのです」

従姉の情報から看護師を、母親からは保健師のよい面を何度となく聞かされるようになり、両者の違いはよく分からないものの、少しずつ看護職にひかれるようになっていた。

高校では理科の先生と看護系の両方に興味を持ちながら、将来の道を考えていた。ただ、化学は好きだけど物理

▲大学の卒業旅行で和歌山県に行ったときのスナップ